

Title	文化創造者としての子ども：藤本浩之輔の教育人類学
Author(s)	矢野, 智司
Citation	臨床教育人間学 (1999), 1: 19-25
Issue Date	1999-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/196955">http://hdl.handle.net/2433/196955</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 文化創造者としての子ども

— 藤本浩之輔の教育人類学

矢 野 智 司

藤本浩之輔は「教育人類学」の立場から、子どもの生活と文化にかんする実証的研究において優れた研究業績を残している。なかでも子どもたちが創る文化としての遊びに着目した研究は、未開拓な分野を切り開くものであった。

もちろんこれまでに子どもの文化を捉えた優れた研究がなかったわけではない。オーピ夫妻の『学童の伝承知識とことば』（1959年）では、子どもの間で伝達される文化としての童謡が民俗学の対象として取りあげられている\*<sup>1</sup>。あるいはH・B・シュワルツマン\*<sup>2</sup>やB・サットン＝スミス\*<sup>3</sup>らによって、子どもの文化にたいする優れた文化人類学的研究がなされている。しかし、藤本の独自性は、この「文化を創る子ども」という視点からどこまでも子どもの世界に分け入ったことにある。

藤本は、大人が子どものために作る絵本や児童文学やおもちゃといった「児童文化」と異なり、子どもが自分たち自身で創り、伝承する文化を「子ども自身が創る文化」と名づけた。そして、アメリカの文化人類学者ラルフ・リントンの文化理論の定義をもとに、子どもの文化を次のようにシンプルに定義した。すなわち「子ども自身の文化とは、一つの集団や社会の子どもたちによって習得され、維持され、伝承されている子どもたち特有の生活様式である」。

この機能主義の文化定義は、習得・維持・伝承の側面に重点が置かれており、文化創造の側面を含み込むことができないという点で、藤本自身の子ども文化理論の文化定義としては不十分なものであったにちがいない。しかし、子ども文化の豊穡な多様性を収集し、記述し、分類することではおおきな力を発揮した。

ところで、このような子どもの文化の中心をなすものは「遊び」である。しかし、遊びといってもいろいろな遊びがある。それをすべて、子ども文化と名づけることができるのだろうか。藤本は、その場その場で消えてしまう遊びではなく、文化としての形をもって

長い年月にわたり、子ども集団のなかで育まれ、継承されてきた、かごめかごめや自然を材料にしての草花の遊びといった「伝承遊び」を、子どもの文化として位置づけようとしたのである。

「子ども自身が創る文化」への着目は、これまで問われることのなかった子どもの事象へと藤本を導くことになった。たとえば、藤本はなぜ子どもは群れているのかという卓越した問いを提出している。これは、ほとんど誰もが子ども集団のなかを通過して大人になりながら、かつて誰からも問われたことのない問いである。この問いにたいする藤本の答えは明解だ。それは、子どもに伝達され共有される固有の文化があるからだということである。

子どもの文化の存在が、子どもを大人とは異なる独自の集団として成り立たしめているという見方は、子どもの集団の発達の意味とは何かを問う心理学的な視点とは異なる、子ども理解の社会学的・人間学的視点を提出しているといえるだろう。そして、この観点からみるならば、子どもの間に子ども固有の文化が消失するなら、子どもという特有の在り様もまた消失すると推測することになる。つまり藤本の定義は、子どもというものの存在を、子ども文化によって位置づけたことになる。それは、従来の社会学にたって見たときの「社会化される存在としての子ども」とも、心理学的に見られた「発達する存在としての子ども」とも、位相の異なる子ども観を切り開いたことを意味している。

さらにこの視点は、私たちの当たり前のように思っている子どもの見方に、強く変更を促すものである。藤本は、子どもの生活から構造をもった生活様式としての「子ども自身が創る文化」を取り出すことによって、大人の文化とは異なる子どもの文化の存在を明らかにしたが、さらに進んで、この子どもの文化を大人の文化や学校の文化と同列に位置づけることを主張した。

これは、子どもにも子どもの独自で固有の世界があり、この小さな子どもの世界（スモール・ワールド）は守られる必要があるといった、「子どもの発見（発明）」以来、なんども繰り返されてきた消極的な主張ではない。藤本は、子どもという存在をたんに文化を継承するだけではなく、大人と同様、文化を創造する主体としてみたのである。

子どもは、文化的に未熟な者であり、そのために教育を必要とするのだというのが近代的な子ども観の常識である。だからこそ、子どもは学校で人類の遺産としての文化財を教科をとおして学習しなければならないといわれてきたのである。この子ども観の歴史からとらえるとき、「子どもは自分で文化を創造するのだ」という藤本のテーゼは、たいへん

ラディカルな主張ということができる。しかも、子ども文化というのは、大人の文化の補完物などではない。

藤本は、この子どもの文化が、子どもの社会性や自律性の獲得、知性や感性の発達にとって不可欠であると考えていた。子どもが健やかに大人になるためには、どれほど学校が努力したところで、学校教育だけでは不十分だということになる。このことは、人間の成長における多様な変容の在り方を、教育という名のもとに、すべて学校教育へと収斂させていこうとする近代教育学の流れにたいするアンチ・テーゼでもあった。

しかし、藤本は「子ども自身が創る文化」の意義をたんに主張しただけではなく、先駆的な仕事『子どもの遊び空間』（日本放送出版、1974年）にみられるように、子どもの具体的な生活にたいする実証的な調査・観察・インタビュー・アンケートを繰り返し実施して、「子ども自身が創る文化」の現状を明らかにしようとした。ときには、同じ場所で10年後に同じ調査をしたりして、時間軸のなかでの子ども文化の動態を明らかにしようとした。フィールドの重視こそが、藤本浩之輔の学問の中心であった。

たとえば、子ども文化の歴史的な動態をみるために、藤本は「天下町人」というボール遊びの起源と、そのルールの変遷の過程を、大阪府の小学校をフィールドにして詳細に調査した。これは、日本における遊びの起源と発展が検証され、子どもが実際に創りだした文化としての遊びが確認された、数少ない事例である。このような研究によって、私たちは自分たちが子ども時代を通過するときに出会い、夢中になって遊んだ一つ一つの「遊び」（子どもの文化）が、何代にもわたる無名のしかも無数の子どもたちの集団によって、幾度も工夫を重ねられ、発展させられてきたことを知るのである。（『子ども文化の変容に関する研究——枚方市における天下町人ゲーム十三年間の変容』『京都大学教育学部紀要』第29号、1983年）

また、子ども文化が大人文化に劣るものではないことを示すために、藤本は子どもたちがとんぼのヤンマを捕まえる方法の分布を調査している。「ヤンマ釣り」という大人の日常生活にとっては意味のない遊びによって、子どもがどれほど詳細にヤンマの生態と形態を観察しているのか、ヤンマを釣るための技術をどのように高めてきたかを明らかにし、さらに、その観察と技術が代々の子どもたちによって継承・発展されていたかを示している。

子どもたちは、ヤンマの雄と雌との区分にとどまらず、両性具有のヤンマを注意深く別名でよび、さらには、成熟の度合いによっても詳細に区別して、それぞれに個別の名前を

あたえている。このような子ども自身によって生みだされた分類の仕方のなかに、学校で学ぶ近代的な理科学的分類法とは異なる、子どもの「野生の思考」の具体的な展開を見いだすことができるのだ。(「子どもの文化としてのヤンマ釣り」『日本民俗文化資料集成第12巻 動植物のフォークロアII』三一書房、1993年)

そして、藤本が丹念に調査して製作したヤンマの名称の一覧表をみると、私たちは子どもたちの観察力の確かさと緻密さ、子どもの関心によるヤンマの区別にたいする命名の言葉の豊かさに驚き、あらためて文化を創りだす子どもということの意味を考えないではおられない。

さらに藤本は、だれも記録するものがなければ永遠に消えてしまう、子ども自身によって創られ維持され伝承されてきた文化の多様な表現を、採取し、記録し、分類し、考察する仕事を残している。著作『日本伝承の手作りの遊び』(相馬大との共著、創元社、1972年)、『草花あそび事典』(くもん出版、1989年)、『野外あそび事典』(くもん出版、1994年)は、そのような一連の仕事の成果であるが、これはたんに命を失った子ども文化を記録するのではなく、またふたたびこの子ども文化が子どもたちによって受け継がれることを願った仕事である。これらの著作が、学術書という形態や文体ではなく、親や子どもに楽しく読めるように、やさしい手ざわりの本にできあがっているのは、著者のこのような願いによるものである。

この仕事の流れのなかで、聞き取りの著作『聞き書き 明治の子ども・遊びと暮らし』(本邦書籍、1986年)も理解することができる。この著作は、明治時代に子ども期を過ごした老人たちに、子ども時代の遊びと暮らしを聞き取り表わした名著である。

このような仕事は、子ども期を思いだしながら話をする老人の言葉に、丹念に耳を傾け、語るものと時間を共有することなしには不可能な仕事である。老人たちのかつて生きられた子どもの時間といま生きている時間、その老人の言葉に耳をかたむける藤本自身によって、かつて生きられ、いま生きられている子どもの時間、それぞれが交錯し響きあい、いまという時間のなかで生きているからこそ、語られる言葉は、生きた言葉として私たちの心を打つのである。私たちのなかの子どもの時間を目覚めさせるのである。

これは、藤本が民俗学から得た思考の在り方がなんであったかを、よく理解できる著作である。藤本におけるフィールド調査とは、このような人々との出会いを基礎に形作られていた。調査紙による調査のときでも、個別の子どもたちとの会話を重視し、そこから解釈の枠組みを得ていたのである。

このような長年にわたる「子ども自身が創る文化」の実証的研究の蓄積をもとに、藤本は大人の遊び研究の分類法とは異なる、子ども文化独自の分類法を考案した。藤本は、「子ども自身が創る文化」を、言語表現・身体表現・事物表現というように、表現の形式を基準にして、次の三つに分類している。

- ①わらべ唄、えかき唄、動植物の名称などの言語によって表現される文化（言語表現の文化）
- ②ルールのある運動遊び、各種ゲームといった身体によって表現される文化（身体表現の文化）
- ③手作りの玩具、草花の遊びといった事物や生き物にかかわって表現される文化（事物表現の文化）

機能主義的な子ども文化の規定にもとづいて製作された子どもの文化の分類法も、構造主義を通過した今日の文化理論と比較して単純なものである。しかし、この明快な区分は、子どもの文化の豊かさを私たち大人に目に見える形で示すために、たいへん有効なものであった。

藤本は、子ども文化の研究を研究自体のためにしていたわけではない。したがって社会的活動もまた、藤本の子ども文化研究の重要な表現の一環であった。

藤本は、1971年の「冒険学校」以来、1978年「遊びと仕事の村」「親と子の自然教室」といった子どもの文化を援助するさまざまな会を主宰してきた。これは藤本の仕事が、たんに衰退する子ども文化への警鐘を鳴らすことにとどまらず、実践とのつながりを強く意図したものであったことを示している。

もともと藤本の子ども文化研究の問題意識は、昭和40年代（1960年代後半）に顕著になってきた異年齢の子ども集団の解体と、同時に起こる子どもの遊び文化の衰弱という状況にたいする危機感から出発している。それは、失われようとするものへのノスタルジーや哀惜といったものではなく、子どもを育ててきた子ども文化を、子ども自身が失うことによる、子どもの生活の貧困化への危機感とすることができる。したがって、子どもがふたたび自身の文化を創造する場所と時間を確保できることの援助が急務であった。「冒険学校」は、このような理由からできている。そして、このような会での実践が、また藤本の子ども文化への問いを深めるもとにもなっていたように思える。

1994年、藤本浩之輔が片岡徳雄らと協力して、「子どもの社会」を研究する会として

「日本子ども社会学会」の創設に努力したのも、子どもの社会を教育学・人類学・社会学といった枠を超えて、さらに児童学や児童文学などもふくんで包括的総合的に研究することが、子ども文化の実態を明らかにし、この重要性を人々にアピールするうえで不可欠と考えたからである。

明快でシンプルな理論に、奥行と輝きとをもたせることができたのは、藤本浩之輔という個人に身体化した、愛媛の子ども時代の子どもの文化の深さだったに違いない。子どもの遊びに共鳴し、子どもの世界を知ることができたのも、老いた明治期の少年少女の心を開き、繰り返される語りを生きた言葉へと変えることが可能だったのも、藤本のなかに息づいていた子どもの時間だったに違いない。わかりやすくしなやかな理論枠とフィールドへと向かう軽いフットワーク、子どもを見る柔らかな眼、さらに子ども自身の創りだす文化への深い敬意、そしてその背後で熱く鼓動する子どもの時間、藤本の学問は藤本浩之輔という一個の人間のなかでのみ実現できることであったように思われる。

藤本浩之輔の最後の仕事は、第二次世界大戦の日本降伏の日、1945年8月15日に、子どもが敗戦をどのように迎えたか、当時子どもだったひとたちの視点から書かれた手記をまとめることだった。市井の人から小説家まで、さまざまな人々から集められた手記集『あの日の子どもたち』（朝日新聞社、1996年）には、藤本自身の手記も収められている。そのなかで、藤本は敗戦直後の生活を綴りながら、「私たちは、鯨やクジラの軟骨を削ってボールをこしらえた。よくはずむボールであった。」とのべている。藤本が、ナックル・ボールの起源を求めて、世界中をめぐったのは、この経験によっているのかも知れない\*4。

藤本浩之輔は1933年愛媛県に生まれた。1956年京都大学教育学部を卒業、1961年京都大学教育学研究科博士課程を修得退学、その年に大阪府教育研究所研究員、さらに翌年の1962年には大阪府科学教育センター主事となった。1964年より大阪市立大学文学部に転任し、助手・講師を歴任されて1970年に助教授となった。そして、1980年京都大学教育学部に助教授として着任し、1989年教授に就任、教育人間学講座を担当した。また藤本は、日本子ども社会学会理事、日本教育社会学会評議員などをつとめ学会の発展に貢献した。さらに、大阪府社会教育委員、京都府青少年問題協議会委員、大阪市こども文化センター運営委員などを歴任し、1981年に大阪府から教育功労者、1989年には文部大臣より社会教育功労者の表彰を受けている。1995年10月29日死去。

✧註

- \*1 I. Opie and P. Opie, *The Lore and Language of Schoolchildren*, Oxford University Press, 1959. *Children's Games in Street and Playground*, Oxford University Press, 1969. *The Singing Games*, Oxford University Press, 1985.
- \*2 H. B. Schwartzman, *Transformation: The Anthropology of Children's Play*, Plenum Press, 1978.
- \*3 B. Sutton-Smith, *A History of Children's Play: New Zealand, 1840-1950*, University of Pennsylvania Press, 1981.
- \*4 藤本は死の直前まで「子どものコスモロジー」というイメージで、新しい研究構想を練っていた。それについては、鶴野祐介「エピローグ 藤本浩之輔先生の『子どものコスモロジー論』の構想」藤本浩之輔編『子どものコスモロジー——教育人類学と子ども文化』所収、人文書院、1996年、を参照。

(この文章は、藤本浩之輔編『子どものコスモロジー——教育人類学と子ども文化』の「あとがき」に加筆したものである。臨床教育学講座年報『臨床教育人間学』の創刊にあたり、教育人間学講座の教授であった藤本浩之輔先生の仕事の意味について考えておきたかった。)

(やのさとじ 京都大学大学院教育学研究科)